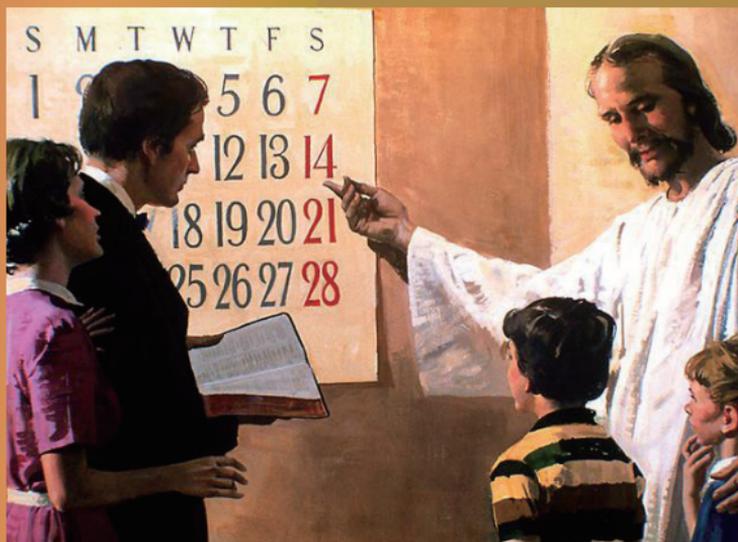


*Keeping of
God's Holy Sabbath*

神の聖安息日の 遵守

Revival Booklet Series No.6



リバイバルシリーズ No.6

E・G・ホワイト
ボブ・マッシューズ



SUNRISE MINISTRY

目次

教会への勧告上85-110頁 Contents

神の聖安息日の遵守	1
「安息日を覚えよ」.....	4
日没礼拝	8
家族の最も神聖な時間	10
「さあ、われらは主を拝もう」.....	13
安息日学校	15
「安息日に善を行うのは良い」.....	18
安息日に登校すること	21
世俗の仕事を休む日	24
安息日遵守の祝福	28
神の安息と安息日	30
我々は何を宣べ伝えていないか	32
天国が始まるころ	34
土曜日だけの SDA ?	37
神に導かれた活動	40
安息日の戒めと他の戒めとの関係	43
もっと詳しく研究なされたい方のために...	48

神の聖安息日の遵守

E・G・ホワイト

安息日を守ることの中には大きな祝福が含まれているのであって、神は、安息日が、われわれにとって喜びの日であるように望んでおられる。安息日が制定された時には喜びがあった。神は彼のみ手のわざを御覧になって満足されたのである。神は、彼の創ったすべてのものを「はなはだ良かった」と言われた（創世記1：31）。天と地が喜びに満たされた。「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」（ヨブ記38：7）。罪がこの世界に侵入し、彼の完全な作品を傷つけたが、限りなく恵みと、いつくしみに満ちた、全能の神は、万物を創造された証拠として、今もなお、われわれに安息日を与えておられる。われわれの天の父は、安息日を守ることによって、人類の間に、彼ご自身に関する知識を保存したいと望んでおられるのである。彼は、安息日が、われわれの思いを、真実な生ける神である彼に向け、彼を知ることによって、われわれが生命と平安を得るように願っておられる。

主は、彼の民であるイスラエル人をエジプトから救出し、彼の律法を託された時、彼らが安息日を守ることによって、偶像礼拝者たちとの区別がはっきりしていなければならないことを教えられた。これが、神の主権を認める人々と、彼を自分の創造主また王として信じることを拒む人々とを区別するものであったのである。「これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。」「ゆえに、イスラエルの人々は安息日を覚え、永遠の契約として、代々安息日を守らなければならない」（出エジプト記 31：17, 16）と主は言われた。安息日は、イスラエル人が、この世のカナンにはいるために、エジプトから出て来た時、彼らを区別するしるしであったように、今日神の民が天の安息にはいるために、この世から出て来る時、彼らを区別するしるしなのである。安息日は神と彼の民との間の関係を示すしるしであり、彼らが神の律法を尊ぶというしるしである。それは、彼の忠義な臣民と、律法の違反者たちとを区別するものである。

キリストは雲の柱の中から、安息日に関して宣言し「あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわ

たるしるしであって、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである」（出エジプト記 31 : 13）と言われた。神が創造主であることのしるしとして、この世界に与えられた安息日は、また彼が聖別する神であるとのしるしでもある。万物を創造された力は、人を彼ご自身に似せて再創造する力である。安息日を清く守る人々にとって、それは清めのしるしである。真の清めは神との調和であり、彼と同じ品性になることである。それは、彼の品性の写しである原則に、服従することによって得るものである。そして安息日は服従のしるしである。心から第四条の戒めを守る者は、律法全体に服従し、服従することによって彼は清められるのである。

イスラエル人に対するように、安息日は、われわれに対して「永遠の契約として」与えられた。神の聖日を尊ぶ人々にとって、安息日は、神が彼らを、彼の選民として認めておられるという、しるしである。それは、神が彼の契約を、彼らに対して守られるという保証である。神の統治権のしるしを受け入れる者はすべて、自分を神聖な永遠の契約下に置く。その人は服従という黄金の鎖に自分を結び付けるが、その鎖の一つ

一つの輪が約束なのである。(6T349, 350 ページ)

「安息日を覚えよ」

.....

第四条の戒めの始めに、主は「覚えよ」と言われた。人間が多く思いわずらいや混乱の中で、律法の全要求に応じることから言い逃れをするように誘惑されること、また、その神聖な重大さを忘れることを、神は知っておられたので、彼は「安息日を覚えて、これを聖とせよ」(出エジプト記 20 : 8)と言われたのである。

一週間中、われわれは安息日を覚えて、戒めに従ってこれを守るように準備をしていなければならない。ただ法律的なことのよう安息日を守ってはならない。われわれは、生活上の行動すべてに対して安息日が持つ霊的な意味を、理解すべきである。安息日を、彼らと神との間のしるしと考え、彼は彼らを清める神であることを示す、すべての者は、彼の統治の原則を表す。彼らは日常の行動の中に、神の国の法則を取り入れる。安息日の清めが、彼らの上へのぞむようにと、彼らは

毎日祈る。日ごとにキリストを友とし、彼のご品性の完全さを例示する。毎日彼らの光が、良い行いとなって、他の人々を照らすのである。

神の働きの成功に関係するすべての事のうち、最初の勝利は家庭生活の中で勝ち取らなければならない。安息日の準備は、ここで始めなければならない。一週を通じて、両親は、彼らの家庭が、子供たちが天国に行く準備のための学校とならなければならないことをおぼえなさい。適切な言葉を語るようにしなさい。子供たちが聞くべきでないような言葉は、一言も彼らの口から漏れてはならないのである。いら立った気持ちを少しでも起こさないようにしなさい。両親よ、神のために教育するようにとあなたがたに子供を与えられた、聖なる神の面前で生きているかのように、週を通して生活しなさい。安息日には主の聖所で全員が礼拝する用意ができているよう、神のために、あなたの家庭で、小さい教会を訓練しなさい。毎朝、毎晩、あなたの子供たちを、彼の血しおで買われた嗣業として、神に捧げなさい。神を愛し、神に仕えることは、最高の義務であり特権であることを、彼らに教えなさい。

安息日が、このようにして覚えられる時、世俗の事

物が靈的なことを侵害するようなことは許されない。六日間の労働日に関係したどんな務めも、安息日まで残されることはない。主が休み、気分もさわやかでおられた日に、われわれが疲れ果てていて彼の礼拝に従事できないほど、週日に、この世の仕事でエネルギーを消耗し切るような事はしない。

安息日の準備は、一週を通してなされなければならないが、金曜日は特別な準備の日とすべきである。モーセを通して、主はイスラエルの人々に「あすは主の聖安息日で休みである。きょう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残ったものはみな朝までたくわえて保存しなさい」と言われた。「民は歩きまわって、これ（マナ）を集め、ひきうすでひき、または、うすでつき、かまで煮て、これをもちとした」（出エジプト記 16：23、民数記 11：8）。天来のパンを料理するために、イスラエルの人々がしなければならないことがあったが、主は、この仕事を、備え日である金曜日にしなければならないと、彼らに言われたのである。

安息日の準備は、金曜日に完成するようにしなさい。すべての衣服が準備され、料理も全部終わるように取り計らいなさい。靴はみがき、おふろはすませなさい。

そうすることは可能である。それを習慣にすれば、できるのである。安息日は、衣服の修繕をしたり、食物の煮たきをしたり、快樂を求めたり、あるいは、その他どんな世的な事のためにも使ってはならない。日没前に、すべて、世俗的な仕事はやめ、通俗の読み物は、見えない所に片付けてしまいなさい。両親よ、あなたがたのすることとその目的を、子供たちに説明し、安息日を戒めに従って守るための準備に彼らを参加させなさい。

われわれは熱心に安息日のふちを守るべきである。各瞬間が聖別された清い時間であることを覚えなさい。できる限り、雇用者は金曜日の正午から安息日の始まるまでの時間を、働き人たちに与えるべきである。彼らが静かな気持ちで、主の日を迎えることができるように、準備をする時間を与えなさい。そういうやり方をするによって、あなたは、たとえこの世の物においても損はしないのである。

備え日に、気をくばらなければならない、今一つの仕事がある。この日には、家庭内であっても、あるいは教会内であっても、兄弟間の争いを片付けなければならない。心の中から、にがにがしい気持ちや、怒り、

また悪意を、すべて追い出さなさい。謙遜な気持ちで「互に罪を告白し合い、また、いやされるようにお互いのために祈りなさい」(ヤコブ5:16)。(6T 353-356ページ)

聖安息日を犯すことと神に見なされるようなことは、何一つ、安息日には言ったり行ったりしないようにすべきである。神は、われわれが、安息日に肉体労働を慎むだけでなく、精神が神聖な話題を考えるように、訓練することを要求しておられる。第四条の戒めは、世俗的なことを話し合ったり、軽率な、くだらない会話をしたりすることによって、事実上犯される。頭に浮かんで来ることを何でも、すべて語ることは、おのが言葉を語ることである。正しい事から、それることは、われわれを罪のとりことし、罪の宣告を受ける者にするのである。(2T 703 ページ)

日没礼拝

.....

安息日は、安息日遵守者であると公言する多くの人々が考えるよりも、はるかにまさって神聖なものである。文字通りに、あるいは精神において、安息日を戒めに従って守らない人々によって、主は大いに

はずかしめを受けて来られた。安息日遵守について改革をするように、彼は呼びかけておられる。

日没前に、家族の者は、聖書を読み、歌い、祈るために集まりなさい。多くの者が、この点に不注意であったから、改めることが必要である。われわれは、神に対し、また互いに告白する必要がある。われわれは、神が祝福し、聖別された日を、家族の各員があがめる用意のできるよう、特別な手配を、新たに始めるべきである。

家族礼拝においては、子供たちに役割を持たせなさい。みな聖書を持って来て、各自1、2節ずつ読み、それから、良く知っている讃美歌を歌って、お祈りをなさい。このためにキリストは、モデルを与えておられる。主の祈りは、単なる形式としてとなえるために与えられたものではなく、これは、われわれの祈りのあるべき姿、すなわち単純で、熱心で、包括的な祈りの例なのである。単純な祈りによって、主に、あなたの必要を告げ、彼のいつくしみに対して、感謝を表現しなさい。こうして、あなたは、歓迎するお客として、イエスをあなたの家庭と心の中に招待するのである。家庭では、かけ離れた事柄に関する長い祈りは不適當である。祈

りの時を特権とし祝福と考えるべきであるのに、それによって退屈なものにしてしまう。祈りの時を、興味深い、うれしい時としなさい。

安息日が終わって太陽が沈む時、祈りの声と賛美の歌によって、神聖な時間の終わりを示し、働く一週間の労苦を通して神が共にいて下さるように求めなさい。

主に対して安息日を清く守ることは、永遠の救いを意味するのである。神は「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊ぶ」と言われる（サムエル記上 2：30）。(6T 353-359 ページ)

家族の最も神聖な時間

.....

安息日学校と礼拝のための集会は、安息日の一部を占めるに過ぎない。家族に残された部分を、安息日の全時間中で最も神聖な貴重な時とすることができるのである。この時間の多くを、両親は自分の子供たちと費やすべきである。多くの家庭で、年少の子供たちが、自分にできる最善の努力によって楽しみを見出すよう放置されている。放っておかれると子供たちはすぐ、落ち着かなくなると遊び始め、また何かいたずらをするものである。こうして安息日は彼らにとって、な

んら神聖な意味を持たないものになってしまうのである。

天気の良い日には、
両親は子供たちと一緒に
野や森の中を散歩し
なさい。自然の美しい
事物の中で、安息日が
定められた理由を彼ら
に告げなさい。神の偉



大な創造のみ業について彼らに説明し、この世界は神のみ手によって作られた時には、清くて美しかったことを話しなさい。花も、かん木も、樹も、一本一本がすべてその創造主の目的にかなったのである。見るものが、すべて美しく、神を愛する思いで心を満たした。あらゆる音が神のみ声と調和した音楽であった。神の完全なみ業を傷つけたものは罪であったこと、すなわち、いばらとあざみ、悲しみと痛みと死は、みな、神に対する不従順の結果であることを示しなさい。そして、この世界が、罪ののろいで傷ついているながら、今なお、どれほど神のいつくしみを表しているかを見るように命じなさい。緑の野、そびえる樹木、ここちよ

い日光、雲、露、厳粛な夜の静けさ、星空のすばらしさ、そして、美しく照る月、すべてが創造主をあかしている。感謝することのない、われわれの世界に、降る一滴の雨も、射す一条の光線も、神の忍耐と愛を立証しているのである。

救いの道について彼らに告げなさい。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16)とは、どんなことかを告げなさい。美しいベツレヘムのお話をくりかえして語りなさい。子供たちに、両親に従順な子供としてのイエスや、忠実で勤勉な青年としてのイエス、また家計を支えるために助けておられるイエスを示しなさい。それによって、あなたは救い主が、青年の試練や困惑や誘惑、また希望や喜びを知っておられること、彼らに同情と助けを与え得ることを、子供たちに教えることができる。時々、聖書歴史の中の興味深い物語を一緒に読みなさい。安息日学校で彼らが学んだことについて質問し、彼らとともに次の安息日の教課を、勉強しなさい。(6T 358, 359 ページ)

安息日には、厳粛な気持ちで、家族を神にささげる

べきである。戒めは、われわれの門のうちにいる、すべての者を含む。すなわち、その家の居住者全員が、世俗的な仕事をやめて、神聖な時間を信仰的な事のために用いなければならない。神の聖日に、全員一致して、喜びにあふれた礼拝をもって神を崇めなさい。(2T 185 ページ)

「さあ、われらは主を拝もう」

.....

キリストは「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ 18:20)と言われた。二、三人の信者でもいる所ではどこでも、安息日に集まって、主のみ約束の成就を求めなさい。

神の聖日に、彼を礼拝するために集まった、少数の群れは、エホバのゆたかな祝福を求める権利があるのである。彼らの集まりに、主イエスが、名誉の賓客であることを信じるべきである。安息日を清く守る真の礼拝者はみな、「わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである」(出エジプト記 31:13)との約束の成就を求めるべきである。(6T

360, 361 ページ)

安息日は、世俗的な働きから心を転じて、神の恵みと栄光を沈思黙考することにより、祝福となるよう、人間のために創られたのである。神の民が集まって、彼について語り、み言葉の中の真理に関する思想や考えを話し合い、時間の一部を祈りのために費やすことは、必要である。しかし、これらの時は、安息日であっても、長くしたり、興味のないものにして、退屈するようにしてはならない。(2T 583 ページ)

教会に牧師がいない時は、だれかが集会の指導者として指名されなければならない。しかし、彼は説教をしたり、礼拝時間の大部分を使う必要はないのである。短い、興味深いバイブル・リーディング〔聖書問答集による聖書研究〕の方が、説教よりも有益な場合がよくある。そして、この後に祈禱とあかしのための集まりをすることができるのである。

安息日の集会を興味深いものにするために、各自がしなければならないことがあると、感じるべきである。ただ形式のために集まるのでなく、思想を交換し、日常の経験について述べ、感謝を言い表し、また、神と

彼がつかわされたイエス・キリストを知るために、神の光を求める真実な願いを述べるために集まるのである。キリストについて、共に親しく語り合うことは、心を、人生の試練や戦いに対して強める。クリスチャンであって、しかも自分自身の中に引っ込んでいられると、決して考えてはならない。各自が人類の大きな織物の一部であって、一人の経験が、その仲間の経験によって、大きく決定されるのである。(6T 361, 362 ページ)

安息日学校

.....

安息日学校の働きの目的は、魂の収穫でなければならぬ。運営の仕方が完全で、設備も、望むすべてがあっても、子供や青年たちがキリストに導かれなければ、学校は失敗である。なぜならば、魂がキリストに引きつけられない場合、形式的な宗教の感化の下で、ますます感動しにくくなるからである。教師は、キリストが、助けを必要としている人々の心の戸をたたかれる時、協力すべきである。もし生徒が、聖霊の訴えにこたえて、イエスがはいることができるように、心

の戸を開くならば、イエスは彼らの理解力を拡大して、神のことがわかるようにして下さる。教師の働きは単純な働きであるが、イエスの霊によってなされるならば、神の霊が働いて、これに深みと能力が加えられる。

両親よ、毎日少しの時間をとっておいて、あなたの子供たちと、安息日学校の教課を勉強しなさい。聖書にある歴史の貴重な教訓を学ぶために費やす時間を犠牲にするよりは、むしろ必要なら社交的訪問をやめなさい。両親も子供たちも、この研究によって益を受けるのである。教課に関連した、より重要な聖句は、務めとしてでなく、特権として暗唱しなさい。最初は暗唱もよくできないかもしれないが、することによって力がつき、しばらくすると、あなたは、尊い真理の言葉を、このように蓄えることに喜びを感じるようになる。そして、この習慣が、宗教的な成長に非常に価値のある助けとなるのである。…

あなたの家庭における聖書研究を組織的に行いなさい。世的なことは何であっても放っておきなさい。すべての不必要な裁縫や、食卓のための余計な準備は廃しても、魂が生命のパンで養われるように必ずしなさい。一日一時間、あるいは三十分でも、楽しく、互い

に交わりをもって、神のみ言葉の研究にささげるならば、その効果は計り知れないのである。いろいろな時に、さまざまな事情のもとで、特定の問題に関して言われたことを総合して、聖書をそれ自体の解説者にしなさい。訪問者や、来客のために、あなたの家庭のクラスを中止しないようにしなさい。もしも、勉強の途中で来客があった時は、それに参加するように、彼らを招きなさい。世的な利益や快樂を得るよりも、神のみ言葉の知識を得ることの方が重要であると、あなたが考えていることを示しなさい。

ある（安息日）学校では、残念ながら、教課の記事を読む習慣が一般に行われているが、そうであってはならない。たびたび、不必要に、または罪深いことにさえ用いる時間を、聖書の勉強に費やすならば、そうする必要がないのである。普通の学校の勉強よりも、安息日学校の教課を、教師や生徒たちが、より不完全に学ぶ理由はない。それは、比較できないほど重要な問題を取り扱っているのであるから、もっとよく学ぶべきであり、この事の怠慢を神は喜ばれない。

安息日学校で教える者は、神の真理で自分の心が熱し、活気づいていなければならないし、み言葉を聞く

だけの者とならず、み言葉を行う人でなければならない。彼らは、枝が、ぶどうの木の中で養われるように、キリストの中で養われるべきである。天来の恵みの露が、彼らの上に下らなければならない。それは彼らの心が、かわいい植木のように、つぼみが開いて、大きくなり、神の園にある花のように良い香りを放つためである。教師は神のみ言葉の勤勉な研究者であって、毎日、キリストの学校で学んでいることを、いつも示さなければならない。そして、偉大な父であり、世の光である彼から受けた光を、他の人々に伝えることができなければならない。時々、役員を選ぶ場合、決して個人的な好みによって支配されず、神を愛し、おそれ、神を助言者にする人であると、あなたが確信する人々を、責任の地位につけなさい。(2TT 557-566 ページ)

「安息日に善を行うのは良い」

.....

家庭でも教会でも、奉仕の精神が表されなければならない。この世の働きのために、六日間を与えて下さった神は、七日目を祝し、聖別して彼ご自身のために取っておかれたのである。この日、彼の働きのために献身

するすべての者を、彼は特別に祝福される。

全天は安息日を守っているが、ぼんやりして、何もしていないのではない。この日は、神と、われわれの救い主キリストに、お会いするのであるから、魂の全エネルギーが目ざめるべきではないだろうか。われわれは信仰によって、彼を見ることが出来る。彼は、一人一人の心を元気づけ、祝福したいと切望しておられるのである。(6T 361, 362 ページ)

神のなさは、病人や苦しんでいる者が世話をされるように指示された。彼らを楽しめるためにしなければならない労働は、必要な働きであって、安息日を犯すことにはならない。しかし、不必要な働きは、すべて避けるべきである。多くの者が、備え日にして置くべきであった小さい事柄を、安息日の始まるまで、不注意に遅らせる。そうであってはならない。神聖な時間の始まるまで怠っていた働きは、何であっても、安息日が過ぎるまで行わずにおくべきである。(2TT 184, 185 ページ)

安息日に料理をすることは避けるべきであるが、冷たい食物を食す必要はない。寒い気候の時には、前日

料理したものを温めなさい。食事は単純であっても、味がよく、魅力的であるようにしなさい。ごちそうと思われるようなもの、家族が日常食さないようなものを何か用意しなさい。

服従する者に約束された祝福を、望むならば、われわれは、もっと厳格に安息日を守らなければならない。われわれは、避けることもできるのに、よくこの日に旅行をするのではないかと、わたしは恐れる。安息日遵守に関して、主が与えて下さった光に調和し、われわれは、この日に船によっても、車によっても、旅行をすることにつき、もっと注意深くなければならない。これらの問題で、われわれは、自分たちの子供や青年たちの前に、正しい模範を示さなければならない。われわれの助けを必要としている教会に到着して、神が彼らに聞かせたいと望まれるメッセージを彼らに与えるためには、安息日に旅行しなければならないかもしれないが、できるかぎり他の日に、切符を買い、すべて必要な手はずを整えておくべきである。旅に出かける時は、安息日に目的地に着くことを避けるような計画を立てるために、あらゆる努力をすべきである。

安息日に旅行をしなければならなくなった時には、

われわれの注意を世的なことに引く人々と一緒に行かないように努力すべきである。われわれの精神が、常に神を思い、彼と語るようにしなければならない。機会ある度に、真理について他の人々に話すべきである。苦しんでいる人を救い、困っている人を助けるために、いつも用意ができていなければならない。そういう場合は、神から与えられた知識と知恵を活用するように神は望まれるのである。しかし、事業のことについて話したり、またどのような一般的な世俗の会話に携わったりしてもならない。いつでも、またどこにおいても、神は、われわれが安息日を尊ぶことによって、彼に対するわれわれの忠誠を証明するよう、要求しておられる。(6T 357-360 ページ)

安息日に登校すること

.....

第四条の戒めに従う者は、だれでも、自分と世の中との間に境界線が引かれていることに気付く。安息日はテストであるが、人間が要求しているものではなく、神のテストなのである。それは、神に仕える者と仕えない者とを区別するものであって、真理と誤びゅうの

間の争いの最後の大争闘が、この点で起こるのである。

われわれの中のある人々は、安息日に子供たちを学校に行かせた。彼らは強制されたのではないが、学校の当局者たちが、六日間登校しなければ、子供たちを受け入れることに反対したのである。これらの学校の中には、生徒が普通の教育課目を教えられるだけでなく、各種の作業をするように教育されるところがあるが、こういう学校へ、律法を守る人々と公言している者の子供たちが、安息日に行かされていたのである。ある両親は、安息日に善を行うのは良いと言う、キリストのみ言葉を引用して、自分たちの行動を正当化しようとした。しかし同じ論法が、子供たちのために生活費をかせがなければならないから、安息日に働いても良いということを立証することになり、何をすべきで何をすべきでないかを示すための限度や境界線がなくなってしまう。

われわれの兄弟たちは、第四条の戒めに従うことができない場所に、子供たちを置いている間、神の是認を期待することはできない。彼らは、子供たちが七日目に登校することから免除されるために、当局者たちとなんらかの取りきめをするよう努力すべきである。

もしもこれが失敗に終わる時、彼らのなすべきことは明瞭であって、どんな犠牲を払っても神のご要求に従うことである。

ある人々は、主が要求される事において、それほど厳格ではない。あまり大きな損失をしてまで安息日をきびしく守ることは自分たちの義務ではない、あるいは、国の法律に反するような立場に自身を置くことは、なすべきことではないと主張する。これが、神を尊ぶ人々と、彼をはずかしめる人々とを区別するものなのである。われわれの忠誠を証明しなければならないのは、この点であって、すべての時代において神が彼の民を扱われた歴史は、彼が厳密な服従を要求されることを示している。

両親が子供たちに、世間の人々と共に教育を受けさせ、安息日を普通一般の日とするならば、神の印は彼らの上に押されることはできない。彼らは世界と共に滅ぼされるが、彼らの血は両親にかからないであろうか。しかし、われわれが神の戒めを忠実に、自分の子供たちに教え、親の權威に服従させ、信仰と祈りによって、彼らを神にゆだねるならば、彼は、われわれの努力と共に働いて下さる。それは彼が約束されたからで

ある。そして、みなぎりあふれる災いが地を過ぎる時、彼らはわれわれと共に、主の仮屋のひそかな所に隠されることができるのである。(2TT180-184 ページ)

世俗の仕事を休む日

.....

死ぬべき運命にある人間が、自分のとるに足らない世的な利益を得るために、大胆にも全能者と妥協しようとすることは、最もひどい無礼さである。時折安息日を世俗の仕事のために使うことは、安息日を完全に否定するのと同様、ひどい律法の犯し方である。なぜならば、それは主の律法を便宜上の問題にすることになるからである。「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神である」と、雷鳴のようにシナイ山からとどろいている。彼を憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、彼を愛し、彼の戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至らせると、宣言される彼には、中途半ばな服従や、ふたごころは受け入れられない。隣人のものを盗むことは、小さい問題ではなく、そのような罪を犯したことを発見された人が着せられる汚名は大きい。しかし、他の人から詐取するような

ことは、軽べつする人間が、彼の天の父が祝福し、特別な目的のために分けられた時間を、恥も知らずに盗むのである。(4T 249, 250 ページ)

言葉と思想を慎むべきである。安息日に事業の問題を話し合ったり、計画を立てたりする人は、事実上の仕事の取り引きをしているものと、神に見なされる。安息日を清く守るためには、われわれの精神が、世的な性質の事柄を考えることさえ許しておいてはならないのである。(2TT185 ページ)

神が語られたのであって、人間が服従することを彼は意図しておられるのである。そうすることが都合が良いかどうかを聞いておられるのではない。生命と栄光の主が、高い司令官の地位を後にし、悲しみの人で、悩みを知った人となり、人間の不従順の結果から人間を救うために、恥辱と死を受けられた時、ご自身の都合や楽しみは考慮されなかった。イエスは、人間を罪の中にあるまま救うのではなく、罪から救うために死なれたのである。人間は、誤った生活習慣を捨てて、キリストの模範にならい、自分の十字架を負って彼に従い、自己を制し、どんなことがあっても神に服従しなければならない。

世的な利益のために安息日に働くどんな人も、事情によって正当化はされない。もし神が一人の人間に許されるなら、全員に許されても良いはずである。なぜ貧しい兄弟は、安息日に働くことによって家族をより良く扶養することができるのに、生活費をかせぐために安息日に働いてはいけないのか。なぜ他の兄弟たちも、あるいは、われわれのすべてが、都合の良い時だけ安息日を守ってはいけないのか。シナイ山からのみ声が、答えておられる。「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息である」(出エジプト記 20 : 9, 10)。

あなたの年令は、神の命令に服従することからあなたを免除しない。アブラハムは老年になって、非常な試練を受けた。主のみ言葉は、悲しみに打ちひしがれた老人には、恐ろしく、また不適當に感じられたが、彼は決して、その正当さを問うことも、また服従するのにちゅうちょすることもしなかった。彼は、自分が年をとって弱っているから、自分の人生の喜びであった息子を犠牲にすることはできないと、訴えることもできた。この命令は、息子に関して与えられた約束に矛盾することを主に思い出していただくよう言えたか

も知れない。しかし、アブラハムの服従には、不平や非難はなかった。神に対する彼の信頼は絶対であった。(4T 250-253 ページ)

イエスの牧師たちは、安息日を覚えてこれを清く守らない人々を、譴責する者として立たなければならない。安息日に世的な会話をしながら、安息日遵守者であると主張する人々を、彼らは親切に、しかも厳粛にいさめるべきである。神の聖日には神に全く心を向けるよう奨励しなければならない。

聖別された時間をむだに過ごすことも自由だと、だれも考えてはならない。安息日の多くの時間を、安息日遵守者が睡眠に費やすことを神は喜ばれない。そうすることによって彼らは創造主を辱め、また彼らの実例によって、六日間は休息に費やすためには自分たちにとって貴重過ぎる、と言っているのである。彼らは、必要な睡眠を自分から奪ってでも、お金をもうけなければならないとして、失われた睡眠を、神聖な時間を眠って過ごすことによって補うのである。そして彼らは、「安息日は休みの日として与えられたのである。わたしは休息を必要としているから、集会に出席するために自分から休息を奪うことはしない」と言って弁解

する。そういう人は聖別された日を誤用しているのである。彼らは、この日には特に、これを守ることに家族の関心を起こさせ、場合によって集まる人数の多少はあっても、祈りの家に集まるべきである。安息日を与えられている神の感化力が、週を通して彼らと共にあるように、彼らは時間とエネルギーを霊的な活動に用いなければならない。一週間中で安息日ほど、信仰的な思考や感情のために有利な日は他にないのである。(2T 704 ページ)

安息日遵守の祝福

.....

第四条の戒めの主張する事を認め、安息日を遵守している人々を、全天が安息日に見つめ見守っているのを、わたしは示された。天使たちが、この神聖な制度に対する彼らの関心と、高い尊敬の念に、注目していた。厳密に信仰的な気持ちをもって心の中でキリストを主と崇めた者、安息日を自分のできる最善を尽くして守り、その神聖な時間を活用するために努力し、安息日を喜びの日と呼ぶことによって神を崇めようとめた者—これらの人々を、天使たちは光と健康をもっ

て特に祝福していた。そして特別な力が彼らに与えられた。(2T 704, 705 ページ)

天の要求に厳格に従うことは、霊的な祝福と同時にこの世での祝福をももたらす。(PK 546 ページ)

『安息日を守って、これを汚さず、その手をおさえて、悪しき事をせず、このように行う人、これを堅く守る人の子はさいわいである。』「また主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は—わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで楽しませる」(イザヤ書 56:2, 6, 7)。(各時代の争闘下巻・174 ページ)

天と地がつづくかぎり、安息日は、創造主の力のしるしとしてつづくのである。そしてエデンがふたたびこの地上に栄えるときに、神の聖なる休日は、天下のすべての者によってあがめられるのである。「安息日ごとに、」輝く新天地の住民は「『わが前に来て礼拝する』と主は言われる(イザヤ 66:23)。(各時代の希望上巻・363 ページ)

神の安息と安息日

ボブ・マシューズ

ベルを押すとすぐに婦人が戸口に現われた。訪問者が近くの大学から来た学生であることを告げると、「ああ、あなた方がセブンデイズ・ディスアドバンテージェス【七日間不利な人々】（セブンスデー・アドベンチストをもじって）の方々ですか」と大声で言った。

我々の多くはだれかに安息日の説明をして、「日曜日の代わりに土曜日を守っているわけですね」というような答えを聞くことがあるが、『七日間損をしている人々』と言われたのはこれが初めてである。我々の土曜日遵守は、単に『日曜日の代わりに』土曜日を守る人々と呼ばれるよりも、七日間全部に益をもたらす人々と言われたいものである。

セブンスデー・アドベンチストは最終時代の世界に救いの使命を伝える者として神に召されていることを信じている。この使命の中で最も重要なものの一つは真の安息日の宣言ということである。神が創造の第七日目に休まれ、この日を聖別されたという我々の確信

を支持する聖句に不足はないし、一方我々のこの立場が神のみ旨に沿わないということを示す御言葉はどこにも見当たらない。

この記事の目的は、正しい安息日がどれかを聖句で立証することではなく、安息日の意義と、それを効果的に伝えるための条件を考えることである。「われわれがこんなにも長く、この罪と悲しみの世界にとどまっていること」（伝道 696 ページ）自体、主が今もって再臨されない理由であると言ってよい。

ヘブル 3 章及び 4 章はイスラエルの民を更に意味深い霊的経験へと導くものである。何人もこの経験なくしては神の国を十分に理解できないだけでなく、救いの喜びをほかの人々に伝える資格を備えることができないのである。私はヘブル人への手紙の著者が、我々にとって極めて重要なことを述べていると信ずるのである。安息日遵守者と自らを呼んでいる我々にとって安息日を守るということは一体いかなる意味を持っているのであろうか。我々は言葉や行為を通して友人に、親せきの者に、隣人に、そして世間一般に安息日をどのように紹介しているのであろうか。彼らは一体我々の何を見、何を聞いているのであろうか。彼らにとって

第一日よりも第七日を守ることが特別な祝福となっていることを彼らは認めているであろうか。正しい日を守ることが確かに違いをもたらすという証拠があるであろうか。安息日についての聖句が果たして本当に安息日の教理を回復するという真の目的に貢献しているであろうか。「わたしは神が安息日を理解してもいなければ守ってもいない子供たちを持っておられるのを見た。彼らはまだ安息日についての光を拒んではいなかった。悩みの時の開始にあたって、われわれが出て行ってもっと徹底的に安息日を宣べ伝えたとき、われわれは聖霊に満たされた。…そしてこの時、神に選ばれた者たちはみな、われわれが真理を持っていることをはっきりと知って、出てきたわれわれと一緒に迫害に耐えた」(初代文集【アドベンチスト・ライフ 1975年4月号、12, 13 ページ】)。

我々は何を宣べ伝えていないか

.....

聖霊が改心させる力であることは間違いないが、われわれが安息日の使命の中で伝えてこなかった点があるとすれば、これは何であろうか。正しい安息日を完

べきに証明して、安息日を認めないことを不可能にするような強力な聖句を発見することがそれであろうか。あるいは我々がいつそうきちょうめんに注意深く安息日を守るという模範によって人々を説得することであろうか。

イスラエルが民族として神の永遠の御目的を果たし、約束された「安息」に入ることに失敗したことにより、ヘブル4:1-11における約束は今日の我々に提供されている。しかし、ここに我々の弱さを見出すのである。ここで重要なことは、安息日を守り、伝えるということですら、もし「信仰と混同される」(2節)ならばそれは無意味であるという点である。イスラエルの人々は救い主を十字架につけた後、安息日を守るために家路に着いたのであった。

ヘブル4章において安息日は例証的に用いられている。聖日を守るということは今後とも主と我々の日々毎の関係の証であり、結果である。「安息日は神と神の民との間のしるしである」(教会へのあかし第6巻349, 350 ページ)。このような関係はイエスがニコデモに語られたように「もう一度生まれなければ」生まれながらの人間の体験し得ないものである。我々の安息

日遵守は「神をすべてのものの創造主とする信仰のみならず、神がすべての男女をして創造の際に意図された地上の住民のように造り変えてくださるお方であるとする信仰」をも証するものでなければならない（SDA 聖書コメンタリー、ヘブル4：4の注）。

改宗したユダヤ人を含めて、すべてのクリスチャンが入るべきこの『安息』はキリストに対する完全な服従と神の永遠の御目的に合致する時に得られる魂の休みと霊的な意味において全く同じものである」（SDA 聖書コメンタリー第7巻418ページ）。我々はイエスの招きを通してのみこの体験に入ることができる。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ11：28）。

天国が始まるどころ

.....

エレン・G・ホワイトはこれを次のように説明している。

「われわれがイエスを通して休みにはいるとき、天

国はこの地上に始まる。わたしのもとにきて、わたしに学びなさいとのイエスの招きに応じてみもとに行くとき、われわれの永遠のいのちが始まる。天国はキリストを通してたえず神に近づくことである。幸福な天国にいればいるほどますます栄光がわれわれに示されるであろう。神について知れば知るほど、われわれの幸福はまし加わるであろう。この世にあってイエスとともに歩むとき、われわれはイエスの愛に満たされ、イエスのご臨在に満足する…。この世にあってわれわれは、人間の性質の耐えられることをすべて受ける…」(各時代の希望中巻 53 ページ)。ここにセブンスデー・アドベンチストの使命の真の力がある。この世は単に間違っただけを守っているという理由で神から遠ざかっているのではない。正しい安息日の日はアドベンチストが神にある安息を体験し、天国が実にそこにおいて始まることを自らの身をもって証する時にはじめて周囲の人々に正しく理解されるであろう。もしも世の人々がわれわれが神の栄光を全的に体験していることを認めるならば何千という人々が一日のうちに改心するに違いない。

週のすべての日を神の御目的と御意志に服従させる

ことから生まれる幸福、平和、そして完全な平安こそが喜びの基であり、ここから初めて正しい日を祝うという結果が生ずるのである。この体験を経ないでは、安息日が巡ってきた時に自発的に心から祝うということとはできない。正しい結果を正しい原因のないところに期待し得ない道理である。この点が転倒すると「日曜日の代わりに土曜日を守るという不都合」が生まれるのである。このようなアプローチには人の心に訴える力は存在しない。それはただ正しい安息日に関する議論を引き起こすだけである。

セブンデイズ・ディスアドバンテージエスという言葉の中には我々が受け止める皮肉以上の問題が含まれているかもしれない。我々はいによる救いというユダヤ人が試みていたのと同様の錯誤を繰り返してはいまいか。それは「神からその栄光を奪い、福音のにせもので世の人々をあざむいた。彼らは世の救いのために神に献身しようとしなくて、世を滅ぼすサタンのうつわとなった」(各時代の希望上巻 26 ページ)。「しかしもしクリスチャンが、名前だけのクリスチャンなら、彼らはききめを失った塩のようなものである。彼らは世にあってよいことのために感化力を及ぼさない。彼

らは神について間違っただ印象を与えるので、未信者よりも悪いのである」(各時代の希望中巻 11 ページ)。

果たして世の人々は我々の安息日の喜びの源泉が七日間の日毎の経験にあることを見るであろうか。

土曜日だけの SDA ?

.....

靈感による言葉は、われわれが天のカナンにはいるのが遅れているのは、イスラエルをカナンの地に入れなくさせていたのと「同じ罪」のためであると告げている(伝道 696 ページ)。われわれは、進んでこの罪を直視し、悔い改め、勝利を与えてくださるよう神に呼び求める用意があるだろうか？

ヘブル書 4 章の 10 節は、この問題の核心をついている—すなわち「自己」の問題である。というのは、神の安息に入るものはだれでも、神がみわざをやめられたように、自分もわざをやめるからである。われわれは、「神の安息」にはいるためには、われわれもまた自分のわざ(それをここでは「自分に仕えること」と表現しておく)をやめねばならない。要するに、一週

に一日－それが正しい日であっても－自己に仕えることをやめるだけでは、「神の安息」にはいるという神の御目的を果たすことにはならないのである。つまり、週の間は自己に仕え安息日には神に仕えることは、二人の主を兼ね仕えようとするものである。しかし主は、われわれが毎日、自分に仕えることをやめるよう求めておられる。

「どうすれば」それができるか。このことについて靈感による教えは次のように語っている。「毎朝、その日一日、神に献身して、すべての計画を彼にお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手にゆだねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります」(キリストへの道 94 ページ)。こうした生き生きした経験なしでは、われわれの安息日礼拝はみな、イスラエルの礼拝のように価値のないものになってしまう。

こうした靈感の指示にわれわれが従うことを妨げるようなものはすべて、それ自体が善であれ悪であれ、罪となって、主の来臨を遅らすものとなる。「主の民と称している人々のうちに、不信仰とこの世的な傾向が

あり、聖別されておらず、そして争いがあるために、われわれはこんなにも長く、この罪と悲しみの世界にとどまっている」(伝道 696 ページ)。と靈感の言葉は告げている。これらのことは、すべての反逆の根—利己心—から生じてくる症状である。

「自分に仕え自分を高める思い (は)」「創造主のご計画とは逆の (ものである)」(各時代の争闘下巻 230 ページ)。「わたしたちは、絶えず自己を捨て、キリストに頼ることによってのみ、安全に歩くことができる」(キリストの実物教訓 140 ページ)。われわれは、キリストに心にはいついていただいて日々われわれの利己的な性質を十字架につけるか、それとも「またもや神の御子を…十字架につけ」るか、そのどちらかである。実際、もし本当に、「われわれがイエスを通して休みにはいるとき、天国はこの地上に始まる」(各時代の希望中巻 53 ページ)のなら、われわれはこの地上で天国を理解し経験する必要がある。

「天国は喜びに満ちている。そこには、驚くべき犠牲を払われたおかたに対する賛美が鳴り響いている。…天国ではすべてのものが気高く高潔である。だれもがみな、他の人の利益と幸福を求めている。自己を求

め自分に対する関心にふけるものはだれもない。自分の周囲の者たちの喜びと幸福を見ることが、すべての清い者たちの最高の喜びである」(マイ・ライフ・トゥデイ 359 ページ)。大きなものも小さなものも、被造物のうち何一つ、自分だけの利益のために生きているものはないのである。

神に導かれた活動

.....

「人間の利己心よりほかには、自分だけのために生きているものは何もない。…栄光の天使たちは、与えること—墮落してきよくない魂に愛としんぼうづよい見守りを与えることに喜びを感じず。…『わたしは自分からは何もせず』、『生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きている』。『わたしは自分の栄光を求めてはいない』。『自分をつかわされた方の栄光を求める』とキリストは言われた(ヨハネ 8:28, 6:57, 8:50, 7:18)。これらの言葉の中に、宇宙の生命の法則である大原則が示されている。…この法則が実に天において破られたのである。罪は利己心から起こった」(各時代の希望上巻 2-4 ページ)。

これはまさに、第一の戒めと第二の戒めが意味しているところのものではないであろうか。この「生命の法則」の一体どこに、利己心—自分に仕えること—のための余地があるだろうか。主はわれわれが、「神の統治は、すべての造られたものへ、豊かな祝福を与えることを意味する」（人類のあけぼの上巻1ページ）ということを知るよう望んでおられる。かくして、「この世にあってイエスとともに歩むとき、われわれはイエスの愛に満たされ、イエスのご臨在に満足する…この世にあってわれわれは、人間の性質の耐えられることをすべて受ける」（各時代の希望中巻53ページ）。

自己を捨てることがどんなに素晴らしい実を結ぶかを、いったん味わったなら、どうしてわれわれはそれを隣人たちに分け与えずにおられるだろうか。われわれがかつて自分自身の上に惜しみなく注いでいた愛は、われわれの隣人に向けられるようになる。われわれはもはやそれを必要としないのである。神の愛と日ごとの導きは、われわれが「耐え」うるすべてを与えてくださる。

これはもちろんわれわれがもはや自分や自分の家族のために働かなくてもよいということではない。われ

われは「働いてあなたのすべてのわざをせよ」（出エジプト 20：9）と命じられている。またそれは、われわれがもはや休息やリクリエーションやほかのさまざまな活動のことを計画しなくてもよいということではない。自分で生計を立てること、自尊心、休息、「リクリエーション」は、現実のこの世の生活に欠かせないものである。しかしながら、その意味するところは、これらすべての活動が、われわれ自身の生き方と同様、新しい主人、すなわち内住の御霊の直接の導きのもとに置かれるということである。

われわれは神の栄光を表すために神のみかたちに造られた。われわれはキリストの血潮によってあがなわれた。神の御目には、われわれは無限の価値を持っているのである。われわれに対する神の愛は計り知れない。しかしわれわれは、神の愛に完全に信頼し、この上なく神を愛することによってのみ、われわれが造られたその目的を果たすことができる。そのときはじめてわれわれは、神が人々を愛しておられるように、隣人を愛することができるようになる。

「キリストが世の人々を愛されたようにわれわれも彼らを愛する時、その時われわれにとってキリストの

使命は達成されるのである（ヨハネ 15：12）。われわれは天国にふさわしい者となる。なぜならわれわれの心のうちには天国があるからである」（各時代の希望第三巻 114 ページ）。これが、ヘブル 4：9 の「安息日の休み」が言うところのものである。われわれは、そのような経験は土曜日の夜のサンセットに始まると考えてよい。そしてそれは一週間を通して毎日続き、第七日安息日を祝う時にその頂点に達し、最も価値ある成就を見るのである。神のご品性を生きて反映する者として新しい一週間を始め、この罪と苦しみのうちにある日常の世界の中で神をあかししていくことは、聖日を守ることに劣らぬ神聖な責任ではないであろうか。土曜日の夜の日没礼拝は、それだけの重要性を持ってはいないだろうか。

安息日の戒めと他の戒めとの関係

.....

さて、安息日の戒めの原則が、神の全体的な法則すなわち生命の法則を成し遂げることにあるということは明らかになったと思われる。安息日の戒めは、それに先立つ三つの戒め〈神との最高の愛の関係〉を果た

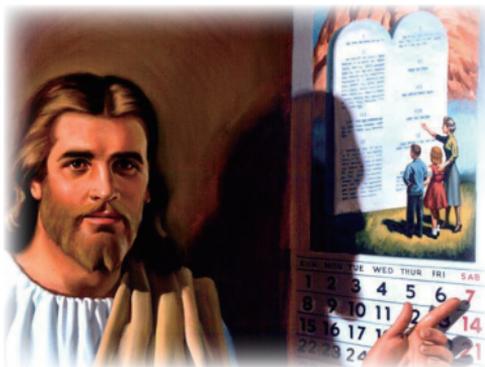
すことなしには従い得ない。そしてこれのみが、他の六つの戒め（隣人たちとの利己心のない愛の関係）をわれわれが果たせるようにしてくれるのである。

ルシファーが「自己のための働き」を始める前は、偉大な創造主であられる神に仕え、拝み、そのみ心を果たすことが、すべての生けるものの最高の喜びであった。彼らは造られたその最初の時から、神への賛美の声をあげてきた。創造主とすべての自由な精神の所有者たちは、美しく、完全で、利己心のない、愛の関係を持ってきた。そして被造物たちの間にも、生き生きした、利己心のない、互いの愛の関係があった。安息日のどの靈的原則も—この世界の創造の時までは、現在のような安息日の戒めや安息日そのものもなかったのであるが—これらの二つの愛の関係によってはたされていた。神の子供たちに、自己の思いから離れよと叫ぶ必要は一切なかったのである。ルシファーがこのもともとの完全な安息日の休みを打ちこわしたときはじめて、神はある一日を造る必要をお感じになった。それまでは、愛の創造主によって各自の心に彫り刻まれた無我の愛の法則が、あの美しい安息日の調和と礼拝の体験を維持してきたのであった。

われわれは罪というものを、神の戒めの一つあるいはいくつかを破ることだと考えているかもしれないが、しかしこれらの律法違反は、実はわれわれの墮落した性質のもっとも奥深いところではびこっている実際の病氣—すなわち利己心—の症状にすぎない。罪は、神の御目的の代わりに、あるいは神の御目的に加えて、自分自身の利己的な目的を持ち込もうとしてきたし、今もそうである。しかしこれは、生命の法則という第一の法則を犯すことであり、安息日の原則を破ることである。ここにルシファーのそもそもの罪がある。神の永遠のご意志は、無我の愛という動機だけをお受入れになる。

「したがって、わたしたちは、この安息に入るように努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にな

らって、落ちていくものが出るかもしれない」(ヘブル4:11)。「なぜなら、神の安息に入るものは、神が



みわざをやめて休まれたように、自分もわざ（自己に仕えること）をやめて休むからである」（同 10 節。RSV 訳参照）。

神の聖安息日の遵守 -リバイバルシリーズ-

※頒布価格 100 円

発行 平成 24 年 1 月 16 日
著者 エレン・ホワイト、ボブ・マシューズ
発行所 サンライズミニストリー
〒 905-0428
沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471
電話 0980-56-2783
FAX 0980-56-2881
Email info@sunriseministry.com
www.sunriseministry.com

もっと詳しく研究なされたい方のために...



“スタディバイブル”



口語訳
解説付き聖書
各 10,000 円

標準型（幅 153mm、高さ 220mm、厚さ 38mm）
余白付大型（幅 165mm、高さ 235mm、厚さ 38mm）

難漢字ふりがな付き。上質の合成皮革。E. G. ホワイトの注解、脚注、引照付き、地図、チャート、金のりんご、聖書語句索引、口語訳聖書の標準ページを左右余白に付記。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

info@sunriseministry.com

www.sunriseministry.com



リバイバル小冊子シリーズ

No. 1 安息日問答

No. 2 アピール

No. 3 装身具について

No. 4 狭き道の旅

No. 5 リバイバルと改革

No. 6 神の聖安息日の遵守

No. 7 今

No. 8 終末時代における霊の賜物

No. 9 小さな光と大きな光

No. 10 預言の霊に関する指導原理

No. 11 サタンのわな

No. 12 人類が直面している世界情勢

No. 13 田舎の生活

No. 14 十戒

No. 15 主のぶどう園

No. 16 背教のアルファ

No. 17 終わりの時に備えよ

No. 18 どのようにして安息日を守るのか

No. 19 キリスト論

No. 20 救いの確証

No. 21 もうひとつの箱船

